

メンバー

大塚賢一 46才
木倉 博 39才
福迫順一 38才
安田豊太郎 32才
小西雅美 31才

Mountaineering Ski

天候
晴れ

紀行文
大塚賢一
小西雅美

写真&編集
大塚賢一

Vol.10 2001. 5/12-13 白山

この白山へは、今までにもう10回以上は登り詰めている、それだけに親しみやすく素晴らしい大自然に包まれ溶け込ませてくれる魅力をもっている山である。夏には白山にしかない色とりどりの高山植物を咲かせ楽しませてくれ、春山スキーには雪洞泊やテント泊をしてダイナミックな斜面の大滑降、その年の雪の付き具合によってさまざまなふところを滑らせて楽しませてくれる。

テントを背負って滑るのが当たり前になっているので色んな行動に対しても余裕がありバリエーションが広がっていく今日このごろである。しかし、白山あたりでは我々のような重装備を背負っている登山者や山スキーヤーは見かけない。

私にとってのシーズンのファイナル山スキーは白山と決めている。今年は今までに経験したことのない素晴らしいご褒美に恵まれて最高のフィナーレを飾ることが出来た。



テントサイトから見た珍しいサンピラー

本当に心から「山の神」に感謝で一杯である。

昨年はテントが無かったのでやむなく雪洞を掘り楽しい一夜を明かしたものの、今年はシーズン始めからテントを背負って行動するのを常習として鍛えていたので、山頂直下のコル 2550 m付近でテント泊を決め込む。そこでは今まで白山では見たこともない夜景に包まれ、おまけに無風とあって、マイナス2度の夜でも寒く感じられなく楽しい晩際会を始めた。

イカ漁の漁り火、町の夜景、その上を幻想的なうっすらと雲が漂よい、真上にはダイヤモンドを散りばめたような眩しいくらいの星空・・・、こんな景色がこの白山にあったのかと新しいページをめくったような心躍る世界を見て陶醉しきった夜であった。

事前に白山観光協会に電話を入れたところ、今年は雪が少ないので週末は別当出合まで車の乗り入れが出来ますとの快い返事。

しかし・・・・・・・・

今回のコースは砂防新道を登り詰め、1520 m付近からべったり雪が現れ始めアイゼンでスキー引っ張りの装備変更に取り替える。当然ここまではスキーザック固定の強行が強いられる、おまけに市ノ瀬 800 mまで車を走らせるとな、な、何と駐車場には 30 台ほど止まっているではないか?、とどのつまりゲートに頑丈な鍵がかけられ通行止めである。やむなくオンロード 5km の道のりをブーツも背負って歩く羽目(総重量約 28kg)に・・・これにはさすがに疲れるものがあるが、低山の春の芽吹きを体感し、ウグイスの音色を聞きながら気持ちをプラス思考に切り替える。

いつもは甚の助小屋から南竜にトラバースするのだが、クロボコ岩の急斜面にも雪がベッタリついているのでコースを変更して登り詰めると室堂手前の広大な雪原の弥陀ヶ原でガスがたちこみはじめる。地図・コンパスを入念にチェックする。

室堂に着いてもガスは以前として視界



何処に雪があるのか駐車場は春真っ盛りだ!



山頂に向けてシール登行

をさえぎっているのでここで落ち着こうと思ったが、室堂ではテント設営禁止(以前痛い目にあったことがある)。

今日の天気予報は上空 5000 m 付近にマイナス 20 度の寒気が入っているが明日には遠のき快晴になると言っていたのでそれを信じ、テン場は山頂コル付近と決めていたので山頂までの長い斜面を登り詰める、すると白山は見事にガスと風を取り除いてくれ最高の景色を与えてくれて我々を迎え入れてくれるのではないかと。早速山頂まで空身で足を運び奥宮に手を合わせ礼をいう。

テン場作りではスノーソー&スコップが大活躍で素晴らしい今夜の宿が出来上がる。

昨夜は素晴らしい夜景を夢見心地にアルコールが体中を包み込み眠りにつくが、夜中少し寒さに目ざめると我々の吐く息がテント裏地に凍りついていった。

今朝の 5 時の気温はマイナス 8 度であった。テントもバリバリに凍りつき、これでは高いゴアテックスもようを足さないのではないかと疑問であった。



クロボコ岩急斜面の大滑降

岩ヒバリが奏でるハーモニーが鼓膜にやさしい目覚ましとなり、夕べのきらびやかな明かりも金色に雪を染める雄大な太陽によって静寂な白山の夜明けと変わっていく。

山頂からは御嶽山、乗鞍岳、はるか向こうに穂高連峰・立山連峰・・・朝日を背に雄叫びを上げているようである。

今日の行動は、下山すなわちスキーでの大滑降のみである。ガリガリに凍り付いた雪面にエッジを効かせながら、特にクロボコ岩の急斜面の大滑降は魅力一杯であった。私は今回ショートスキーを履いていたので

思いっきりファンスキーであった。

みんな思い思いに今シーズンのファイナルスキーを体一杯に満喫し素晴らしいフィナーレを飾った。

「素晴らしきプレゼントを与えてくれた白山に感謝！そして乾杯！」

小西雅美の白山山スキー

私の白山、ひとつの壁はやはり『ザック』です。



別山をバックにおどける小西嬢

大塚さんのが28キロ、おまけに私の寝床テントまで入っていたと思うと恐縮しますけど。重さにはまだ一番弱いわたしです。

さて、天気は「私が雨女かも??」という周

囲の疑いを晴らしてくれた絶好の白山でした。

ボスの指示でザックに板もブーツも固定しつつ、心はわくわく。でも、いきなりのおっもーいザックには「やばいかも??」、「私、こんなんで今から明日まで行動できんのおー?」、「なんで私以外の女の人はいかなんで耐えられるのおー?」、「どおしょ、ばてたら白山ツアーはこの麓どまりになってまうー!、私のせいで・・・でも今より重なるんやろお?このザック。どおしょ」と、頭をぐるぐる回るのはこのズッシリ感のみでした。

「ほんまに雪あんのお?このかついだ板を使えんまま帰るなんてことないよね??」とときどきもしました。(それぐらい景色が春一色)

駐車場からのゲートが閉まっていた分、別当出合までも歩くことにな

り、おかげで、陽射しを浴びた新緑、木陰にのぞく山菜、すっかり伸び切った蕎麦のとうを眺めながら、5キロも楽しむことができました。往復とも。またおかしなことに、ボスや木倉さんはサンダル仕様。アスリートの心掛けとして、常にランシュは携帯してないためですねー。私も変な靴で危うくマメつくるところでした。(ボスの車に隠しとこ！)

さあ、別当出合に着いてスキーブーツにはきかえて、予定ではここからがスタート地点。すでにザックでよれよれの私は、ちょっと緊迫感。でもブーツ外したらザックも随分軽くなった気がしてきました、歩き始めると

足元を流れる水がなんか心地よくなってテンションもあがってきました。(子供って水たまり歩くの楽しいでしょ、今でも私はけっこう好き！) 白山名物の吊り橋は木倉さんがゆるので、ちょっとこわかったなあ。登山道ではあいかわらず、枝とスキー板との戦いが繰り広げられてました、ってこれは私がかがまないから、ぶつかっちゃうだけなんですけど。

徐々に雪が増えてきて、春登山から、山スキーらしくなってきました。アイゼンはいって、板を引っ張って登る、登る、「どこまで登るのお？」、「大塚さん、どこで待ってるのかなあ??」と大汗かいて、ひたすら上昇。だんだんお腹もすいてきて、パワーダウンしてたらもう1時も過ぎてて納得。待望の小屋



について、お昼御飯を食べたらパワーも復活して、また登る。「もしかして、今日は1日上げるだけになるんちゃう??」

登りきって、数十秒のスキーを楽しみ、テント作りになりました。ピッケルで雪ほったり、山はすることがいっぱい。その間、おっきな夕日がちょっとずつ沈んでいくのが見えました。(サンピラーも！そんな言葉知らなかったー)

暗くなってくると、今まで見えなかった景色が今度は目に入ってきます。石川県の景色！漁り火が。いっぱい着込んで満天の星の下でたった5人だけの白山を堪能しました。

大塚さんはいつも言うけれど、山はまたとおんなじ景色がないってのがほんと魅力的です。そう感じれるフレッシュな心があるからだけ。むちゃ、幸せー。



朝は日の出を見損ねたけれど、昨日と変わらない眺めは充分すぎるほど。

待望の滑りも、かっこわるいけど、充分。(そりゃもっとあってもいいけど!) 雪がなくなったら再び春登山になり、歩いて下山。

私にとって独身最後の山スキーを十分に堪能できました。